

フルトヴェングラー・センター® *The Wilhelm Furtwängler Centre of Japan*

創設 2003 年 10 月 1 日 Established: 1st October 2003

名誉会長 Prof. Dr. アンドレアス・フルトヴェングラー

Honorary President: Prof. Dr. Andreas Furtwängler

Newsletter No.49 / 会報第 49 号 2017 年 8 月

フルトヴェングラー・センター会員の皆様

今年の異常気象も、東日本での冷夏、長雨の他、全国各地にこれまで経験したことのないような集中豪雨という形で、甚大な被害をもたらしました。被害に遭われた方々には心よりお見舞い申し上げます。

さて、会報 49 号では以下の内容をお送りします。

目次

1. 桧山コレクション 第 12 回頒布 CD のご案内 P. 2
2. WFFC1604/5-HYM シューベルト交響曲第 8 番八長調 D944
WFFC1701 (ベートーヴェン交響曲第 4 番変ロ長調) に関するご感想 P. 3~6
3. 寄稿「桧山コレクションの復刻にあたって」連載第 6 回 薬師寺 純平 P. 6~7
4. 第 78 回、第 79 回レクチャー・コンサートのご報告と記録ビデオ P. 8~11
(DVD、ブルーレイ) 頒布のご案内
5. 第 769 回レクチャー・コンサートの感想 中村 匠一 P. 10~11
6. 第 80/81 回レクチャー・コンサートのご案内 P. 12
7. お知らせ レコード芸術 2017 年 10 月号の特集について P. 13
8. 寄稿「続・フルトヴェングラーの手紙」連載第 16 回 会員 田中 昭 P. 13~15

センター顧問山口勲氏（ペンネーム 桧山浩介）から、愛蔵のフルトヴェングラーの78回転盤レコード（以下SP）コレクション全約170枚を寄贈いただいたことは会報第16号（2007年12月発行／曲目明細掲載）でご紹介いたしました。会報36号でご案内の通り、それらの中からSP盤をセンター会員諸兄のフルトヴェングラー研究に供するための資料としてCD化し、ご提供することとして順次制作中です。

今回のWFFC1702/3-HYMは、フルトヴェングラーによるSP時代のベートーヴェン作品の録音から『**ヴァイオリン協奏曲二長調作品61**』（EMI録音 1947年8月28・29日 ルツェルン祝祭管弦楽団、ヴァイオリン独奏：イエフディ・メニューイン）を復刻します。

フルトヴェングラーは生涯に3人のヴァイオリニストと5種類の録音を残しました。今回の1947年録音は、フルトヴェングラーにとって2度目、メニューインとは初めての録音です。

	Ludwig van Beethoven (1770-1827)
	Violin Concerto in D, Op.61 Luzern, 28/29 August 1947 (*) Olsen Discography No. 119 René Trémine Discography No. 141
	Cavatina (Strings Quartet No.13) Berlin, 15 October 1940 Olsen Discography No. 59 René Trémine Discography No. 61
	(*) Yehudi Menuhin (vn.) (*) Luzerner Festspielorchester Berliner Philharmoniker
桧山コレクション FACULTY WFFC1702/3-HYM フルトヴェングラー・センター® The Wilhelm Furtwängler Centre of Japan ®	
Wilhelm Furtwängler	

今回も、「各面をつながない版」と一貫した「つながり版」を2枚にわたって収めました。

SP/LP再生には、GE社のバリレラ型カートリッジを中心に、自作イコライザーを通してDSD収録を行い、その上でハイレゾ・アナログ変換してノイズ処理を行うなど、細心の注意を傾けて行っています。

この盤は、ピッチが高いことでも知られており、検証の結果、4.0%回転数を落とし、適正なピッチになるように調整しました。

また、フルトヴェングラーが1940年に録音したベートーヴェンの『カヴァティーナ』（弦楽四重奏曲第13番第5楽章）をフルトヴェングラーが弦楽合奏用に編曲した、珍しい演奏をフィルアップしました。

WFFC1702/3-HYM

ベートーヴェン作曲 **ヴァイオリン協奏曲二長調作品61**

イエフディ・メニューイン(ヴァイオリン) ルツェルン祝祭管弦楽団

(1947年8月28・29日録音 ルツェルン・クンストハウス)

ベートーヴェン作曲 **カヴァティーナ**

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(1940年10月15日録音 ベルリン・フィルハーモニー)

CD 申込方法

1. 頒布資料代：3,000円（送料込み） 同封の郵便振込票をご利用ください。
2. 申込締切り日：**2017年9月30日** 原則として締切り時のご注文数を元に製作いたします。それ以降もお申込は受けませんが、追加プレス・頒布まで日時を要する場合がありますので、できるだけ期限までにお申し込みをお願い致します。
3. 発送予定：平成2017年10月下旬

<ディートリヒ・フォン・カルテンボルン氏 (バイエルン国立歌劇場管弦楽団チェロ奏者) >
WFFC1604/5

Dear Masayuki,

Once again a nice surprise to find your latest CD in the mailbox. Thank you indeed!

Quite astonishing and interesting to hear such a rare interview, which was new to me and not listed anywhere.

The transfers have the usual high level. My favourites are the Rosamunde excerpts. I think the reproduction of the lower frequencies and the string timbre is really remarkable for a recording from the 1930s. I had the same impression with the Brahms Hungarian dance in one of the earlier issues.

For the Symphonie I prefer the "blue tape" pressing with less surface noise and a very natural sound.

Dietrich

親愛なる政行、

最新の CD がポストに入っていました。楽しいサプライズを本当にありがとう。

極めてレアなインタビューを聞いて、とてもびっくりするとともに興味を持ちました。これは初めて耳にするもので、どのリストにも載っていない録音です。

CD 化はこれまで同様ハイレベルです。私が最も気に入ったのはロザムンデの音楽の抜粋です。

低域と弦の響きは 1930 年代の録音としては驚くべきものです。これは以前センターが制作したブラームスのハンガリア舞曲とも共通する印象を持ちました。

交響曲については「ブルーテープ」盤が、サーフェイス・ノイズが少なくナチュラルな音色でより気に入りました。

(ディートリヒ・フォン・カルテンボルン)

WFFC1701

Dear Masayuki,

Your parcel arrived and I was delighted with the new CD. Many thanks! This time Beethoven 4th from 1950. I bought this recording when I came to Japan for the first time in 2001. Back then there was a record store in the Shinagawa train station where I found it. Since then I like it very much and find it better than the 1952 remake. The natural sound and transfer is again remarkably well done!

Dietrich

親愛なる政行

貴方からの小包が届き、新しい CD を嬉しく受け取りました。今回は 1950 年のベートーヴェン第 4 交響曲です。この録音は私が初めて日本に来た 2001 年に品川の駅中の CD ショップで買いました。それ以来こちらの演奏の方が 1952 年より優れていると感じます。今回の CD 化も自然な音色が素晴らしくよくできていると思います。

(ディートリヒ・フォン・カルテンボルン)

<ヘニング・スミット (オルセン) 氏>
WFFC1604/5

Dear Masayuki,

Thank you very much for sending me 2 copies of Faculty WFFC 1604/5-HYM, containing all of Furtwängler's Schubert recordings for Polydor/DGG. And most surprisingly the interview with Dr. Furtwängler on his recording of his 2nd symphony!

As always with these 78 rpm transfers the sound quality is far superior to any other transfers to either LP or CD. In fact, I prefer the 78 rpm transfer of Schubert's 8th (9th) symphony when compared to the transfer of the LPM 18015-6, especially the woodwinds sound clearer (to my ears).

親愛なる政行、
フルトヴェングラーによるポリドール/DG へのシューベルト録音を全て収録した WFFC1604/5 を送っていただきありがとうございます。最も驚いたのは自作の第2交響曲についてのフルトヴェングラー博士のインタビューです。
いつものことですが、今回の SP の CD 化の音質はこれまでの全ての LP や CD を上回るものです。交響曲第8(9)盤については、私は SP からのトランスファーの方が LPM18015-6 より好ましく感じました。木管の音色がよりクリアーに感じました。

ヘニング・スミット (オルセン)

WFFC1701

Dear Masayuki,

Thank you very much for sending me two copies of Beethoven's 4th symphony, the 1950 VPO recording. Today I had the enormous pleasure of hearing it. I think I have not listened to that performance for more than 20 or 30 years - normally playing the 1943 BPO version, or the VPO 1953 from Munich - thus I was really thrilled by the sound and - especially - the performance. I think the performance is better than the 1952 VPO studio recording - in the same "heavy" manner as the VPO 1947 Eroica is better than the VPO 1952. Of course the sound quality of both of the 1952 recordings are superior to the older 78 rpms, but the "musical" sound you are able to pick up on this new transfer is very fine and distinct - strings, woodwinds, horns and timpani, it all comes out clearly and precisely.

Sincerely yours,
Henning

親愛なる政行、
1950年VPOとのベートーヴェンの交響曲第4番のCDをお送り下さりありがとうございます。今日極めて大きな喜びをもって聴きました。この演奏は20-30年以上も聴いていませんでした。通常聴くのは1943年BPOかミュンヘンでの1953VPOでしたので、このCDの演奏にも音にもドキドキしました。この演奏は1952VPOのスタジオ録音より重量感があって良いと思います。その点ではVPO1947のエロイカがVPO1952より優れているのと同様です。音質それ自体は1952年録音のほうがSPより優れてはいますが、今回の新しいトランスファーからセンターが引き出した「音楽」はととても素晴らしく、明瞭です。弦も木管もホルンもティンパニも全てがクリアーで正確です。

ヘニング・スミット (オルセン)

<匿名希望>

WFFC1701

楡山コレクションのベートーヴェン四番が届きました。

特筆すべきはS Pの良さが出たCDという事で、特に各楽器のこれまで聞き逃していたような小さな音がきちんと入っており、この曲の特徴である美しい音の流れを余すところなく捉えているのがはっきりと分かります。

他のCDとどこか違う、何ともいえない相性の良さのようなものを感じます。

フルトヴェングラーのベートーヴェンといえば奇数番とよく言われますが、この演奏を聴いておられますと偶数、奇数などに関係なく、すべての曲を自家薬籠中のものとしていた事が伝わってきます。いささか大げさな表現ですが、まさに再現芸術の極致であり、フルトヴェングラーのすばらしさをこの曲で体験できました事は、大きな喜びです。

会報の連載も楽しみにしております。

レコード復刻のいろいろに関する連載も門外漢ながら興味深く、特に手紙の連載が楽しみです。なんととっても普段なかなか読む事のできないフルトヴェングラーのちょっとした日常や普段の仕事ぶりが伝わってくるようで、なんと申しましょうか、親しみがわきます。

これが会報の後ろの方に載っているというのがまた身近に感じられてよいです。

内容についての解説が丁寧なのもありがたいです。

未永く続けて頂きますよう。



寄稿

楡山コレクションの復刻にあたって（最終回）

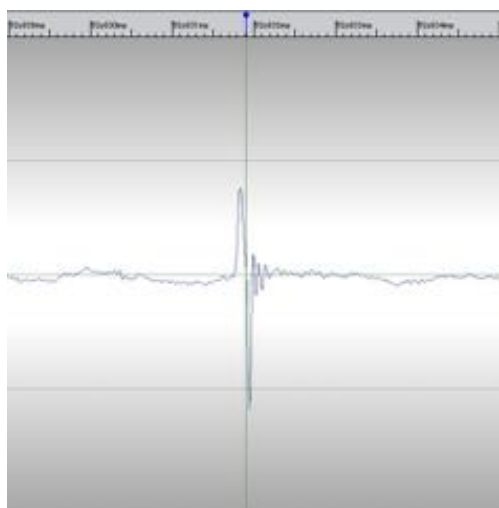
（理事・薬師寺純平）

SPレコードのノイズと言っても様々ですが、英国プレス特有の終始「チリチリ」というものや傷やホコリによる「パチ」というもの、原盤に含まれるもの、サーフェイス・ノイズなどがあります。これらのうち、最も気になるのは、「チリチリ」ノイズと「パチ」ノイズですが、「チリチリ」ノイズの場合、あまりに細かいので音質を損なわずに消すことはほぼ不可能です。しかし、「パチ」ノイズであれば、可能です。

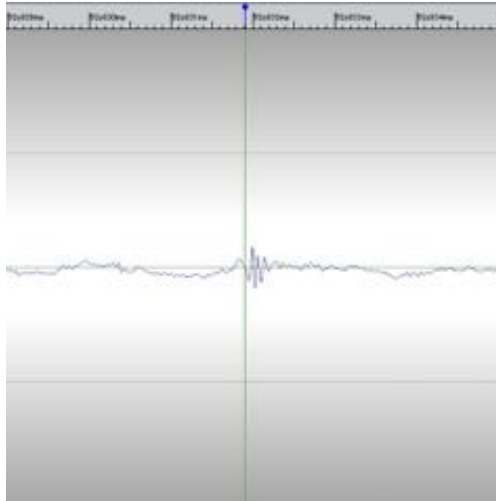
音声をデジタル処理できなかった頃、この作業は録音テープを切り貼りする、つまりノイズ部分を切って捨て、前後をそのままつなぐという方法がとられていたそうです。この作業をやりすぎて演奏時間が随分と短くなってしまったという例もあったそうですし、実際聴いていてテンポが微妙に狂っているようなレコードも少なくありませんでした。

それを今では、波形編集ソフトを使って、音質を劣化させることなく、また演奏時間を変えることもなく、精密にノイズの修正ができるのです。

この図はあるレコードに含まれるノイズの波形です。これははっきりとパチッと耳につくもので1/1000秒ほどのものです。この鋭いピークとディップ、それとそのあとに余韻のように残るものがノイズ成分です。この部分に音楽

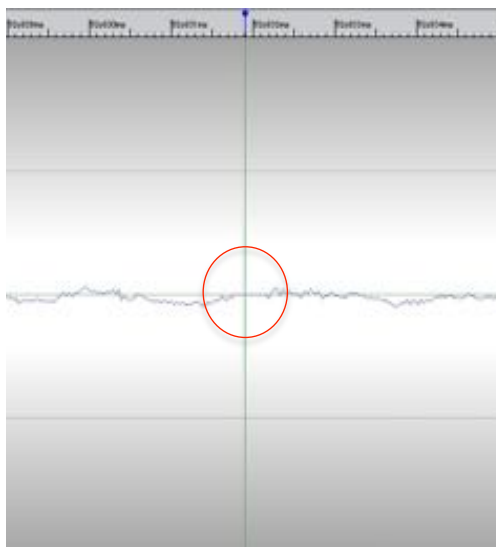


成分は残っていないとみていいでしょう。



ではこれをどのように取り除くか。左の図は、鋭く大きな部分のみ-20dBにしたものです。これで比較的耳につにくくはなりますが、それでもはっきりと聞こえます。

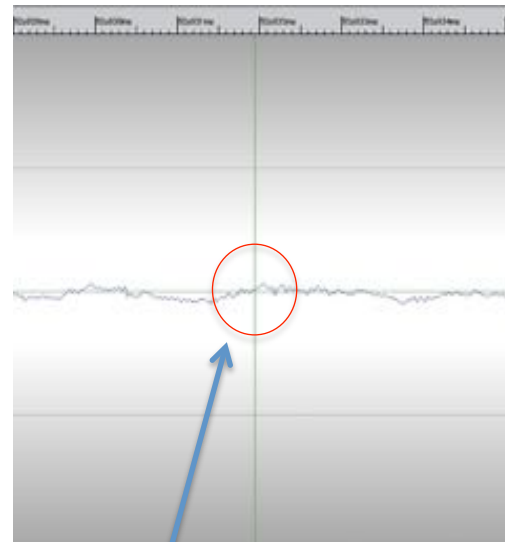
次の方法は、最も簡単かつ乱暴な方法ながら効果的なやり方で、ノイズの部分を消してしまふ方法です。左下の図ではノイズ成分があった場所（○を漬けた部分）が真っ平になっています。つまりこの部分だけ無音状態です。これでノイズは全く聞こえず、しかも全く不自然ではありません。耳を凝らして聴いてもわからないはずですが、しかし、この方法も波形チェックされると、手を抜いたと思われる場合があるので、あまり使いたくありません。



では右下の図はどうでしょう。ノイズがあった部分が「音楽信号」になっています。これですと、聴いていて修復部分は全く分かりませんし、意地悪に波形チェックされてもまずわからないと思います。

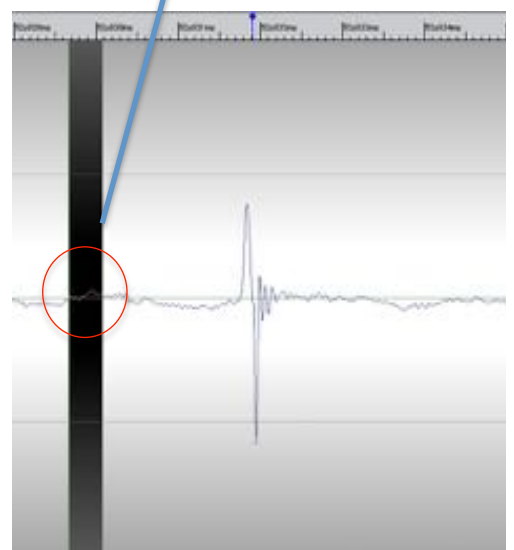
この種明かしはその下の図をご覧ください。

この黒く選択したところの音声信号をもともとノイズがあった場所に貼りつけたのです。音楽信号とは波形の重なり合いですから、近くに似たような波形がある。それを丹念に探



して不自然にならないように貼りつけるのです。そして試聴を繰り返す。この作業を延々とやります。

SPレコードにはこのようなノイズが1面当たり少なくとも数十か所あります。前回の図でお見せした、魚の骨のような波形が無数にあるわけです。組み物ですと、1曲仕上げるのに、数百か所あるいはそれ以上について、上記のような作業を一つ一つ丹念にやっているわけです。



以上、6回にわたり、SPレコードの復刻にあたって、SPレコードの選択から、ピッチの問題、再生の方法、などをお話し、ノイズの修正の話まで来ました。今回は、ノイズの取り方について、ちょっとした企業秘密？を公開してこのシリーズの最後にしたいと思います。このシリーズをお読みいただいた皆様、長らくお付き合いいただきありがとうございました。

(この稿終わり)

#####

第78回レクチャー・コンサート（講師：広瀬 大介 博士）

第78回レクチャー・コンサートは、広瀬博士が、ブルックナーの交響曲の中で最も技巧的に音楽的にもブルックナーらしさが表れているという、交響曲第5番についてお話いただきました。

折しも、今春は、東京交響楽団がジョナサン・ノットとこの曲を取り上げ、さらに急逝したスクロヴァチェフスキに代わって読売日本交響楽団を指揮したロジェストヴェンスキーは何と、シャルク版を取り上げるという偶然も重なり、実にタイムリーなお話を聴くことができました。

今回、まずはブルックナーが生前に聴くことのなかったというこの曲の成立過程から、シャルク改訂版とは何か、そして現在われわれが耳にする「原典版」が受容されるまでのお話いただきました。さらには、この長大な作品から第4楽章を中心に、その緻密な構成、各主題の性格、そして終盤の二重フーガに至る展開など、博士のピアノ演奏を交えつつ、熱弁をふるっていただきました。

前半の終わりでは、終盤でのコラル主題の扱い方について、ケンペの演奏を例に説明いただき、後半はフルトヴェングラーが残した2種類の演奏を聴きました。

フルトヴェングラー演奏については、1951年録音をCetra盤から第4楽章を、1942年演奏はMelodiya盤で全曲を通し演奏しました。

♪♪

第79回レクチャー・コンサート（講師：船木 篤也 氏）

第79回レクチャー・コンサートは、船木篤也氏によるシューマンの交響曲第1番です。船木氏には第74回で、シューベルトの大八長調交響曲とシューマンの交響曲第1番との関係についても触れられておりました。

今回は、シューマンの交響曲第1番がなぜ「春」なのか。その成立の経緯や、音楽的特徴を第オリジナルの手稿や初稿などの資料なども交え、また、他の演奏家との比較を交えながら、1楽章を中心に詳しくお話いただきました。巷では、シューマンの管弦楽法が稚拙であるとも言われますが、はたしてどうなのか。そして最後にはフルトヴェングラーが唯一残した録音をDECCAの初出盤で聴きます。

頒布資料

恒例により上記のレクチャー・コンサートをビデオ収録致しました。遠隔地やお仕事その他で参加いただけない方々のためにDVD-Rとブルーレイ・ディスクで頒布いたしますのでご利用ください。

また、引き続きメニュー画面を用意して扱いやすくするとともに、鑑賞に使用した音源をブルーレイ・ディスクでは、96kHz/24ビットPCM無圧縮ハイレゾ音源として収録しました。DVDは48kHz、16ビットのリニアPCMです。

第78回

DVD-R (2枚組) 版

WFER1703-A/B ¥3,400

ブルーレイ版

WFER1703-BD ¥3,200

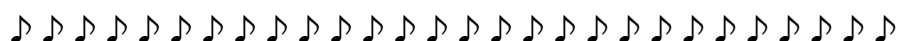
第79回

DVD-R (2枚組) 版

WFER1704-A/B ¥3,400

ブルーレイ版

WFER1704-BD ¥3,200



第 79 回レクチャー・コンサートの感想

(理事・中村匠一)

昨日、千石の沖ミュージックで行われた、フルトヴェングラー・センターの第 79 回レクチャー・コンサートは「ステレオサウンド」誌などにも寄稿されている音楽評論家・東京芸大講師の船木篤也さんをお迎えして、シューマンの交響曲第一番「春」とフルトヴェングラーの演奏(1951年 10 月=ウィーン・フィルとのライブ ミュンヘン・ドイツ博物館)について語って頂きました。

船木さんは、個人としてもシューマンその人とその音楽を愛してやまない方で、日本でももっともっとシューマンの曲、とくにピアノ曲や歌曲以外でも交響曲や協奏曲など管弦楽が関わる曲の演奏があってほしいと熱望されている方でもあります。なので、センターでの講演を通じて、「シューマン普及活動」にも尽力されたいと語っておられたことが印象的でした。

さて、本題の「春」に入りましょう。まず、船木さんはこの曲が作曲された経緯について話されたのですが、ここではまず 3 つの要素について順序だてて話されていました。その 3 つとは

1. シューベルトの八長調交響曲「ザ・グレイト」からの衝撃・影響。
2. 同世代の詩人、アドルフ・ベトガーの「春の詩」からのインスピレーション
3. のちに彼の夫人となる、名女流ピアニスト、クララ・ヴィークとの恋と結婚

という事になります。

まずは、この 3 つの要素の中で最も大きい「シューベルトの交響曲からの影響」ですが、これについては、シューマンがウィーンに滞在していた時、そのスコアを見て衝撃を受けて、写本をライブツィヒに持ち帰り、メンデルスゾーンに見せたところ、彼も非常に驚き、また感心して、1839年 3 月のゲヴァントハウスでの演奏会でメンデルスゾーンの指揮により初演され、大きな成功を収めたことは広く知られています。

シューマンは、彼が見出してきたこのシューベルトの交響曲を聴いて、いたく感激し、自分も交響曲を書こうと一念発起した(スケッチは 4 日で書き上げてしまったそうです。)そして、その「八長調交響曲」の構成がシューマンのこの第一交響曲の構成にも、殊に第一楽章の構成に大きな影響を与えているという事です。

次に、アドルフ・ベトガーの「春の詩」とクララとの恋に関しては、船木さんは両者の関連性をもってお話を組み立てておられました。

資料では「シューマニアーナ」の著作などでも知られる、日本のシューマン研究の権威、前田昭雄先生の訳による「春の詩」が配布されたのですが、その詩の流れ、前 4 節がどちらかというと、陰鬱な冬を想起させる文であるのに対し、最後の一節に「(雲よ) その巡りを変えよー谷間には春が咲いている！」と一気にその陰鬱さから解放された喜びが感じられるのです。

詩のこの部分をドイツ語で表記すると、「O wende, wende Deinen Lauf～」と綴られるのですが、この詩が第一楽章の冒頭、船木さんが「モットー」と呼ばれる部分にまるで歌曲のようにピッタリ当てはまるのですね。なので、この冒頭の演奏で、シューマンがこの詩から受けた啓示、高揚感を表現できるか、を船木さんは大事な要素として見ているというお話もありました。と同時に、この「(ドイツの) 厳しく長い冬から春へ」の高揚感というのは、当時のシューマンの心情をそのまま表したものであったわけです。

当時、彼はクララ・ヴィークとの熱愛、そしてクララの父からの猛烈な結婚への反対、裁判、といった心の浮き立ちと沈み込みを繰り返す日々が続いていました。なので、クララとの結婚を果たし、自分にとって最初の交響曲を書き、一流の作曲家としても認められるのだ、という気概

がここには満ち溢れている。また、コーダの前にある突然出てくる新旋律が、彼の歌曲「献上」に酷似していることから、クララへの愛もこの音楽に込められているのだというのが船木さんの見解でした。

こういう説明を伺った後で、それぞれの演奏家の演奏を聴いてみると誠に面白い。例えば、ホリガーやスウィトナーの演奏は、シューマンの初稿に従って、最初の「モットー」を三度下げて演奏しています。シューマンが生存していた頃はホルンがバルブ無しナチュラルホルンだったので、この音程で始めると演奏が難しい。実際、シューマンとメンデルスゾーンが立ち会ったりハーサルでホルンが上手くこなせず、それを聴いて二人が相談した結果、三度上げて演奏したら上手く行った、という事で、現在の形になったようです。

翻って、フルトヴェングラーの演奏を聴いてみると、シューマンが最もシューベルトから影響を受けたと言われる部分、つまり「序奏からアレグロ」の部分において、シューマンは最初の「モットー」を主題にしながらかアレグロの部分に繋げていくのですが、ここでフルトヴェングラーはシューマンの指示通り、実に巧みにアツチェランド＝加速をかけていきます。また、再現部の前ではシューマンの「フォルテシモ」の指示にさらにフォルテを追加して「フォルテシシモ」として演奏しています。

こういう手法を用いることにより、シューマンとメンデルスゾーンが採用した冒頭の「モットー」を三度上げる という決断が生きてきます。序奏とアレグロの音楽の一体感が増し、情景としても、そしてシューマンの心の風景としても、まさに「春」を迎えたのだ、という歓喜がより一層増すのですね。この辺り、フルトヴェングラーのダイナミクスの扱い方、その譜読みの深さと、それを音として実現してしまえる、往時のウィーン・フィルの能力には舌を巻くしかありません。

その他にも第二楽章の終結部から第三楽章にかけての流れ、ここではトロンボーンとファゴットが重なる半音階的なスケルツォが第三楽章のスケルツォに受け継がれていくのですが、フルトヴェングラーがウィーン・フィルから引き出す、禍々しいまでのトロンボーンの音色は、「春の詩」の前4節の暗い情景と、シューマンの心の揺れを見事に描写している気がしました。

そして、終楽章の展開部は二段階に分けてテンポを落とし、シューマンの「常にクレッシェンド」という指示に対して、オーケストラのボリュームを微妙に伸縮させて、「寄せては返す」波のようなうねりを作り出すことで、そういった心の揺れや逡巡がありながらも、シューマンが様々な困難を乗り越えてこの第一交響曲を世に出した事への喜びと、フルトヴェングラー自身のシューマンに対する尊敬の念が伝わってくるような気がするのですね。特に、その土台を支える低音弦のぶ厚さが、初出のLPで聴くと、聴き手の心を下から突き上げてくるような凄みを感じます。

「シューマンのオーケストレーションには色々な問題がある」というのは、グラスノフを始めとする作曲家や音楽評論家の面々が指摘している通りです。でも、フルトヴェングラーにせよ、そして今日聴かせて頂いたスウィトナーや、古楽的アプローチを試みているガーディナーにせよ、そういった問題点を乗り越え、シューマンの意図をそのスコアや作曲された背景から読み取り、音にしようとしていこうという献身と意志を感じる、だからこそ演奏という行為は「想像を踏まえた『再創造』」たりうるのだという事を実感した4時間余りのレクチャーでした。

講師の船木さんと、場所を整えて頂いたセンター会長の中村さんはじめスタッフの皆様、そしてご参集頂いた参加者の皆様に心から御礼申し上げます。有難うございました。

#####

第 80 回 レクチャー・コンサート開催

開催日時：2017年10月9日（祝）

開演 午後1時30分開演 終了 午後5時ころ

講師 徳岡 直樹 氏 （指揮者）

学ぶ指揮、真似ぶ指揮～フルトヴェングラーの指揮法と音楽作り（仮題）

台湾で指揮者として活躍され、また歴史的録音、とりわけフルトヴェングラーの演奏にも造詣の深い徳岡氏に指揮者の視点からフルトヴェングラーについて語っていただきます。

徳岡氏は、Facebook でも興味深い投稿をされていますので、ご興味ある方はご覧ください。

第 81 回 レクチャー・コンサート開催

開催日時：2017年11月25日（土）

開演 午後1時30分開演 終了 午後5時ころ

講師 船木 篤也 氏

第 79 回レクチャー・コンサートに続き、フルトヴェングラーのシューマンを取り上げたシリーズの第 2 回。今回は第 79 回にお話いただいた第 1 番に引き続き、交響曲第 4 番についてお話いただく予定です。

○参加費：

第 80/81 回とも センター会員 1 0 0 0 円、（非会員 2 5 0 0 円）

○会 場：沖ミュージック・サロン

○お問い合わせ、予約：

電話または E メールで下記まで。満席の場合はご入場いただけませんので、できるだけ予約ください。キャンセルは前日までにお願いいたします。

TEL：080-660-33-444

（電話でのお問い合わせなどは夜 8 時～10 時の間にお願いいたします）

E メール：info@furt-centre.com

終了後、引き続き講師を囲んで懇親会を会場で開催いたしますので、是非お気軽に参加ください。参加費は 2 0 0 0 円程度で、当日会場でもお申し込みをお受けいたします。フルトヴェングラー・ファン同士で軽食とビール、ワインなどを食べ飲みながらの語らいはいかがでしょうか？

#####

お知らせ

レコード芸術 2017年10月号(9月20日発売) 特集「永遠のフルトヴェングラー(仮)」

レコード芸術では、2004年12月号以来久しぶりにフルトヴェングラーが特集されます。各方面からの寄稿の他、当センターの協力によるディスコグラフィ(一部)が掲載されますのでご覧ください。

#####

「続・フルトヴェングラーの手紙」 連載第16回

会員 田中 昭

今回はまとめて2通の手紙を発表したい。各々1929年と1934年に書かれたものであるが、この間の1933年にナチスが政権を取っている。

ではまず1通目から読んでみよう。

レターNO. 18

マンハイムにて(注1) 1929年5月7日

拝啓 教授 様(注2)

誠に残念ですが、今回のフィルハーモニー・コンサートのソリスト(複数)はすでに決定済みなため、貴殿にコンサートのソリストをお願いすることが出来ません。私は貴殿ともう一度共演出来るよう、より良い別の機会が来ることを願っております。

敬具

Dr. ヴィルヘルム・フルトヴェングラー

(注1) この書状が書かれた時、フルトヴェングラーはベルリン・フィルと4月18日(ハンブルク)から5月17日(バンベルク)までの丁度1カ月間に亘る楽旅に出ている。ドイツ(自由都市・ダンツィヒを含む)およびスイスの諸都市を巡る大旅行だった。因みにこの書状の日付けの5月7日にはマンハイムで演奏会が開かれている。

曲目は、ハイドンの交響曲86番、R. シュトラウスの交響詩ドン・ファン、ベートーヴェン交響曲第3番・英雄だった。アンコールの有無は記録されていない。

(注2) Sehr geehrter Herr Professor!の書き出し及び中央配置は格式張った手紙であることを表す。

Wannheim, 7. Mai 1929

Sehr geehrter Herr Professor!

Es tut mir aufrichtig leid, dass Sie diesmal nicht unter den Solisten der Philharmonischen Konzerte sein können, da die Konzerte bereits alle besetzt wurden. Ich hoffe aber, dass die Gelegenheit ein anderes Mal günstiger sein wird und wir doch noch einmal zusammen musizieren werden.

Mit besten Empfehlungen

Ihr ergebener

L. W. v. d. ...

では2通目に移ろう。このメモはベルリン州立歌劇場監督（注1）と印刷された便箋に書かれている。弟子を終生持たなかったことで有名なフルトヴェングラーが、配下のカペルマイスター達（座付指揮者達）に珍しく教育的アドバイスを与えている。では読んでみよう。

レターNO. 19 (メモ)

ベルリン州立歌劇場

支配人

ベルリン 1934年5月23日

カペルマイスターの皆さんへ !

指揮者は聴衆の拍手喝采にどう対応すべきか、という質問への正しい答えとして、私はカペルマイスターの皆さんは今後オペラ終演後、そして5回のカーテンコールの後にのみ姿を見せるようにしてほしい。（注2）。何故なら何れにしても指揮者には、序曲や幕間に聴衆に姿を見せる機会が与えられているからだ。

フルトヴェングラー

（注1）フルトヴェングラーは1934年1月16日にベルリン州立歌劇場監督に就任している。契約は5年間で、年俸は3万6千ライヒスマルクであった。（現在の価値では25万ドル=2千800万円ほど）

（注2）実際にフルトヴェングラー自身が、オペラ終演後にこのアドバイスを守っていたか否かは定かではない。

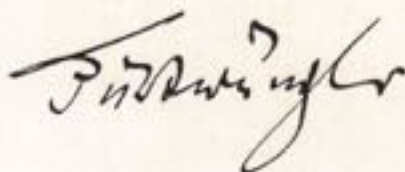
Staatsoper Berlin.

Berlin, den 23.5. 1934.

Der Operndirektor.

An die Herren Staatskapellmeister!

Um in die Frage, wie weit der Dirigent am Applaus des Publikums beteiligt werden soll, eine angemessene Ordnung zu bringen, ersuche ich die Herren Staatskapellmeister, in Zukunft sich nur am Schluss der Aufführung und erst nach dem 5. Vorhang zeigen zu wollen, da ja der Dirigent jeweils durch die Ouvertüre und in den Zwischenakten ohnedies Gelegenheit hat mit dem Publikum unmittelbar in Kontakt zu treten.



《 お 願 い ・ お 断 り 》

◎頒布資料の転売・譲渡等は禁止です！ 名義貸し・転売・譲渡・オークション出品は厳にお断りいたします。

◎郵便振込の控は、お支払いの証拠資料です。紛失せぬよう大切に保管下さい！

センターにお問い合わせをいただく時は、振込控に記載の「郵便局受付日付」と「金額」をお知らせ下さい。

◎海外協会のものにつきましては、あくまで取り次ぎサービスのみをさせていただいております。フルトヴェングラー・センターとしては製品のソースそのもの、および妥当な外見性までの保証責任はもっていないことをあらかじめご了解いただきますようお願いいたします。また、視聴に支障がないような損傷、汚れなどによるお取替え、返品はご容赦下さい。

◎寄稿の内容はフルトヴェングラー・センターの主張・見解を代表するものではありません。

◎発行人の許可なく記事・写真等を無断転載・転用することは厳にお断りいたします。

ホームページに掲載した会報では、原稿がカラー写真の場合はモノクロではなくカラーでご覧いただけます。



フルトヴェングラー指揮ベルリン・フィルハーモニー（1947年5月26日のリハーサル）

フルトヴェングラー・センター会報第49号 発行日 2017年8月

発行人 フルトヴェングラー・センター®

〒223-0052 横浜市港北区綱島東2-14-16

名誉会長：アンドレアス・フルトヴェングラー博士 名誉顧問：ヴァルター・バリリ

名誉会員：ズービン・メータ、クリスティアン・ティーレマン アドヴァイザー：ヘニング・スミット（オルセン）

顧問：松山浩介

会長：理事 中村政行 理事：鈴木芳雄、呼川秀邦、市川悠一、大橋陽一郎、薬師寺純平、中村匠一（音響担当） 監事：鹿内浩胤

チーフ・リサーチャー：清水宏 テクニカル・アドヴァイザー：清水公典

電話（お問い合わせなどは夜8時～10時の間にお願いします）080-660-33-444

郵便振込口座 00240-9-111630

E-mail: info@furt-centre.com

URL: furt-centre.com